

シンポジウム総合討論

北垣：北垣です。時間は 5 時 10 分までしかありませんので、大したことはできないんですけど、せっかく 3 人の方々が渾身の力を込めて発表してくださいましたので、その線に沿うて質疑応答を、というふうに考えております。大越さんはモデルとしてのジョン万次郎のことを言われたわけでありまして、大変面白い考え方だと思っております。つまり万次郎という存在を見ていて、幕府はあんなことを言ってるけれど、海外に出て帰ってきてもやっていけるんだな、という意識を与えた。そういう意味での教師であったということですね。面白い考え方であると思います。

それから吉田さんはいろんなことをおっしゃって、特に『ロビンソン・クルーソー』を強調なさったわけですが、吉田さんが提示されたあの絵本があまりにも美しく過ぎて、驚きました。ちょうど「八重の桜」を見ている時と同じ印象を受けました。つまり私がダニエル・デフォーのテキストを読んできた限りでは、あんな美しい世界ではなかったという気がします。ことにイギリスの国の旗を背景にして、机の上に聖書らしい本を広げて読んでいる、美しい青年、ロビンソン・クルーソーの場面がありました。あのテーブルが非常に平たくて、鉋で削ったようなテーブルなんです。だけど『ロビンソン・クルーソー』を読んでもああいう平坦な板を作ることがいかに難しいかを詳しく書いてます。だからあれは時期としてはごく後のことなんです。

それと筏の上に犬が 1 匹と猫が 2 匹いました。猫は『ロビンソン・クルーソー』の中に出てこないと思いますが、ああいうふうにして動物好きな人にも快感を与えるような描き方をしている絵本であると思います。そしてまた説明を読みますと、非常にキリスト教的に書かれていまして、『ロビンソン・クルーソー』は確かに宗教的な面を持っていますが、あれほど宗教ばかりではなかったという印象を私は受けました。それと吉田さんに関してもう一言、マッキーンのことでも申し上げておきますが、あの 1891 年に出

た新島襄に関する最初の英文の伝記というのは、フィービー・フラー・マッキーン の著作であります。1891年現在では彼女は死んでいたんです。それで姉のフィレナ・マッキーン女史がそれを出版したんですね、ボストンで。同志社の図書館には2冊もあるんだということを今教えていただいたんですが、ハーヴァード大学であれを読もうとすると、貴重本の中に入れてまして、なかなか手続きが面倒です。だから同志社にいることの非常なアドバンテージもあるんだということを、私は感じます。



それはともかくとして、実はあのフィービー・フラー・マッキーンの本を私は翻訳してみましてすぐに分かったことは、A. S. ハーディーの“Life and Letters”の中のいわゆる「脱国の理由」とほとんど一緒なんです。だから実はマッキーンはあれをそのまま受け入れて、それにプラスして自分が新島から聞いたことを書いてるんです。8対2、あるいは9対1と言ってもいいぐらい、あれは新島自身が書いて、ハーディー夫妻に献じたものを見せてもらって、それを利用しています。

井上先生はさすがに堂々としたアプローチをされまして、最後に新島が密航した理由について、国家のためということをつけ加えておっしゃいました。これは今日のディスカッションで非常に面白い問題だろうと、私は思っています。と申しますのは、もしも新島がハーディーから「なぜあなたはわざわざアメリカまで来ましたか」と聞かれたときに、キリスト教のことを勉強したい。教育を受けたい、とは言ったでしょう。しかし日本の国のためと言ったら、ハーディーはさっそく「それはいいことです」と言って受け入れたらどうか、私は疑問に思うんです。すみません、どうも。そういったようなことを私はお三人から感じたんですが、講師のお3人、どなたからでもご発言下さい。

吉田：北垣先生の最後の総括、さすがだと思いますよ。国家について、どんな国家のためかという問題。これは今、私たちが考えるべき問題の一つだと思います。重要なポイントですね。私は新島先生がなぜ脱国したか。徳川政

権に対する反旗を翻して脱国をされたという、これを押さえると若き新島七五三太の心がみえてくると思います。その当時の日本の政権というのは皆さんもご存じの通り徳川封建体制ですよ。その政権は人民＝国民に国内でも簡単に移動の自由を認めなかった。当時の日本人は1人でも海外に脱出することを認めなかった政権です。この政権に対する新島先生のやり場のない批判精神が脱国のエネルギーになって蓄積されていたと私は思うんです。これは鎖国令で庶民に海外に出る自由を認めなかった徳川政権をどうみるかということになります



今でも御用学者によっては、徳川政権をパックス・ロマーナにひっかけてパックス・トクガワーナという言葉で、その天下泰平を謳歌する見方がありますけれど、徳川幕府は農民や商人にとって天下泰平であったと、言えるのでしょうか？確かに元禄の都市は繁栄し町人の文学も花開き享樂的な繁栄を生み出した一面はありました。しかも徳川幕府は外国と戦争をしなかったじゃないかというふうな見方をする歴史学者もいますけれども、新島の見方は少し違ったと私は考えます。彼は若くしてすでに反徳川ですよ。庶民を井戸の中の蛙にして、下級の侍にも自由を認めない政権に対しては、断固としてそれと対決をして、新しい文明を日本に輸入するんだと。この新しい文明とは西洋文明のキリスト教国なんですよ。北垣先生のおっしゃったように、憂国の青年で、その精神はやっぱり国家と向き合ったもので、どういう国家を新島は理想の国と考えたのか。私は素朴ながら後に彼が主張する人民の自主性を尊重する平民主義の国家（State）を思い描いていたと考えたいです。とくに日本人がかごの鳥にされない自由な暮らしができるように、だが徳川幕府はそうでない、その意識から新島の憂国の精神が芽生えたのだというふうに思います。

北垣：井上先生、どうぞ。

井上：北垣先生が最後におっしゃいました件、私はハーディーさんに「なぜあなたは密航を企てたのか」と問われたときに、すぐさま「国家のため」と

という言い方はしなかったと思います。例えば聖書を自由に勉強したいとか、あるいはアメリカの教育を学びたいということが第一に出たと思いますね。

しかし当時、“New York Times”をアルフィーアス・ハーディーは読んでいたと思われますし、当時の“New York Times”を読んでみますと、結構幕末の日本の記事が出てくるんですね。だからあの大物のハーディーさんは、「ああ、日本は傾いてきたな、国家崩壊の可能性があるな」ということを直感的に抱かれたに違いない。そういった中で国禁を犯して、命をかけて密航を企てた新島七五三太という青年が、アメリカで学びたいということに対して手を差し伸べようという、クリスチャン・ヒューマニズムをハーディーが積極的に打ち出すだけのものを新島は伝えたであろうし、ハーディー自身もそれを十分に理解するだけのものを持っていた人だと思っています。

北垣：ありがとうございます。大越さん何か、それに関して、あるいはその他に関して。

大越：はい。新島が海外に脱出したときに、国家的な意識はなかったのかというと、もちろんあったと思います。ただし、当時の新島が、自分がやれることって何かと考えたときに、まだ、例えば「大学を作る」とか、「日本にキリスト教を広める」というところまでは当然いかななくて、例えば「貿易のやり方とか航海術とかいろんなものを翻訳して教えたい」というようなレベルじゃなかったのかな、と思います。自分の弟の双六を翻訳の片腕にしたいと思っていたんですね、新島は。(弟が)亡くなって非常にかっかりしていますね。その頃に森と知り合って、運命が開けていったということで、実際に新島がだんだん成長していったというか、実際に国家的な活躍をしていきたいというのは、環境も含めてアメリカの方で広がっていったのではないかと思いますお



ります。

北垣：ありがとうございます。それでは時間も時間ですので、フロアーからどうぞ、ご意見のある方、あるいは質問のある方、ございませんか。それじゃあまた壇上の方がしゃべります。

吉田：新島の脱国について、私は次のように申し上げたいと思います。国禁を犯して密航を企てるという行動は、どうだったのか？今の時代ではヨットでサンフランシスコまで堀江さんが1人で横断して、大いに歓迎をされるという時代ですが、幕末には江戸幕府の御家の法律では海外渡航は厳禁されていました。もしも国禁を犯して、役人に見つかった場合には自分の命が奪われるだけじゃなくて家族も大きな処罰の対象になるし、その侍が属する藩もなにかの影響を受ける。それでも新島は密航を決意したのです。普通の人には考えられない。その決意と行動には勇気と大胆さがあり、他人にはもちろん、家族にも打ち明けられない目標があった、と思いたくなるのですが。別の見方をするなら、強烈な憂国の精神で、このままでは日本が世界から取り残されてしまう、「憂国また憂国」そのためには藩を捨て、武士も捨てる、その決意の実行はやっぱり彼の大きな目的を正当化させる、そういうものが彼の決意にあったからこそ命を掛けてでも断固実行出来たんだと私は考えます。

北垣：ありがとうございます。大越さん、何か。

大越：はい。「なんで行ったんや」というところに対して。それだけの起爆力がなければ行かなかったんだろう、それは新島が国家的な活躍をしたいということであつたろう、ということではよろしいんでしょうか。井上先生のお考えとしましては。

井上：具体的にまだ21歳の彼に国家的な活躍を将来にわたってやりたいという明白な展望があつたとは思いませんが、一つは例えば『連邦志略』を通して、あるいはアメリカを見て帰ってきた百数十名の乗組員たちのアメリカ観を直接聞いて、日本とは対照的な体制を持った国があるんだと、そこに何か日本の幕藩体制崩壊後のモデルを期待してはどうかという、そういうまだ曖昧模煇な期待を持っていたのではないか。下級武士ではありましたが、彼も、彼は江戸に生まれ育って、小さな安中藩の藩士ではあつたが、日本全体

や極東、あるいはもっと広い世界の情報を集めていた青年だと私は理解をしております。

北垣：ありがとうございます。吉田さんの提起された問題で、こういう面がありました。函館で新島はニコライの家に泊りまして、そこでニコライと『古事記』と一緒に読む、そういう意味での家庭教師をするわけです。そしてニコライとの関係が親しくなったと思う頃に、自分の密かな志を打ち明けて、海外に出たいんだ、助けてくれるかということを書き出したところ、ニコライはそれを断るわけですね。ニコライと新島の間にはそういう意味での断絶が生じてしまった。で、首尾よくワイルド・ローヴァー号に乗って、ポストンに着いた新島は、もちろん 80 日間も待たされますが、ワイルド・ローヴァー号にやってきたハーディー夫妻とも初対面のときに、新島の言っていることがよく分からないので、それでは書いてみるかということで、書かせてもらって、何日間かかけて必死になって書いた「脱国の理由」という文書があります。それを読んで、ハーディーは、これは自分が喜んで支援すべき人であるという決心をしたわけであります。ニコライの場合、うまくいかなかったけれど、ハーディーの場合うまくいった。この辺のことにに関して吉田さん、何か……。

吉田：ニコライはロシア人ですけど、ロシア政府に雇われたキリスト教宣教師ですね。宗派はハリストスですけど、身分は官吏です。私は新島とニコライの意識、とくに幕末の日本を 2 人がどう見たかの違いに興味を感じます。私は最近、このニコライの書いたものと、新島が函館脱出のシーンと脱国の理由も含めて書いたものと比較してみますと、やっぱり 2 人はその思想が違うんです、本来ならキリスト教徒だから、スッと新島はニコライの意識に入っていけるはずなんですけども、来日したニコライは専制政治 (Despotism)、ロシア皇帝の Despotism と日本の徳川政権下の Despotism と比べまして、もちろん御所におられた天皇の支配 (朝廷の権威) と比べて「日本はロシアより緩やかだ」と言うのです。ところが若き新島は日本の政権、徳川の支配は緩やかだとみてないのです。むしろ新島は徳川政権を専制政府だと言ってるのと同じなんです。新島の考えは、徳川将軍の政権は専制政府なんだ、だからつぶさなきゃならないんだと。反対に来日したニコライ

はそうじゃない。そこまでいってないのです。要はロシアの皇帝の支配から比べたらずっと、ずっと日本の方がまだ、という印象をもっていました。その理由は日本の庶民が識字率もロシアよりずっと高いじゃないですか。教養があるじゃないですか。夜、歓楽街へ行くと、商人たちは散財して、都市は経済的にも活気を呈していますよ。この風景はロシアとは違うんです、というようなことをニコライは日本の印象として語っているわけですね。この意識の違いが新島とニコライの間の溝となり、ニコライは新島から、命をかけて脱国すると心の秘密を打ち明けられても、それを拒否したのだと思われます。しかしニコライは親切でした。函館から脱国する直前、新島に写真だけは写していけど、そのお金をニコライが払ってくれた。その貴重な写真は残っていますね。

しかしアメリカの東海岸では、その事情が違ったんでしょう。新島は自分が祖国を捨て、藩の殿様を捨て、愛する両親（家族）をも捨ててここへやってきました。つまりルピコン川を越えて海の向こうからここに来た、と訴え、その理由を書いた文章を読んだハーディー夫妻を感動させたのです。その英語は、彼の脱国の理由を読みますと説得力があります。その英語力を新島がどこから学んだのか。私は新島がボストンで偶然に購入したダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の主人公の感情と聖書の理解力が新島の自己紹介（自分の感情）をハーディー夫妻に伝えるのに役立ったのだと思います。もちろん新島の英語力は1年に及ぶ長い航海の間にセイボリー船長とテラー船長からも教えられたことでしょう。しかし彼はボストンの港で『ロビンソン・クルーソー』を読み、勇気づけられたと日記に書いています。その一件はフィリップス・アカデミーに入学した新島が、そのときの日曜学校の先生であったマッキーン女史にも語っています。その意味では、ボストンに到着後の新島は、その英語力でハーディー夫妻の心を掴むことに成功しただけでなく、マッキーン女史（妹）の心も射止めて、その伝記を書いてもらえることに成ったのでしょうか。このマッキーン女史は最初に新島伝を英語で書き残した女性で、その英文は北垣先生が翻訳されています。

「捨てる神あれば、拾う神あり」です。新島がボストンでハーディー夫妻とマッキーン女史の心を射止めたのは、その憂国の精神（森中章光流の憂国

の理解)と旧約聖書理解の正確さにあったのではないのでしょうか。

北垣：せっかく森中章光さんの憂国の志もおっしゃってましたので、一言、脱国のときに新島が和歌と漢詩を残してるんですね。それは「もののふの思い立田の山紅葉、錦着ずしてなど帰るべき」これ、和歌ですね。そして漢詩は「函館を辞してより、空しく洋人に役せらる。憂国また憂国、憤然身を思わず」ということで、脱国の当初のこの青年新島は漢詩と和歌を残してるんですが、恐らく森中章光さんは大東亜戦争の最中の、17年ですからそういう時流もあったでしょうけど、蘇峰も似たようなことを言ってるかと思いますが、その辺り、憂国の志というのは大越さん、どうでしょうか。

大越：憂国の志というのはもちろんあったと思います。「このままではいけない」という気持ちです。自分は非常に桎梏を感じていたわけですから。「何とかこの国を変えたい」という気持ちは当然あったと思います。私が申し上げたかったのは、そういう気持ちがなくて、例えば「翻訳家でやっていけるやん」ということで、軽く飛び出したということではないと。気持ちはあったけれども、新島が、実際に日本に帰って来れると考えたのは、万次郎という実物モデルが居たということを指摘させて頂いたまでだと思っております。

あともう一つだけ、すみません。ニコライの件はもともと新島が『古事記』を教えたというよりは、『古事記』はニコライから英語を教えてもらう代わりに教えているだけです。ニコライで一番のポイントは、英語を教わる相手であった事です。ところがニコライに「海外で世話してくれ」と新島が頼んでも、ニコライとしては、英国に行かせるツテは無いわけですよ。ニコライ本人としては、「なんだ、英語やりたいと言っとったやんか、この人」みたいなことやったかもしれません。海外へ行かせるツテもないから、ニコライは体よく新島の願いを断った、そういう面もあったんじゃないかと思えます。

吉田：『古事記』と『日本書紀』にえらく影響受けてますよ。『古事記』と『日本書紀』の世界を評価してますね。それが日本の、日本人の精神の中にあると、これはニコライがよくみてると思うんですよ。しかし新島七五三太はその世界から脱出してるんですよ。『古事記』を教えなくなかったと思

ますね。言われたから、しょうがないから教えた。

北垣：ありがとうございます。もうそろそろ時間なんですけど、最後に皆さんに課題のようなものを投げかけて終わりにしたいと思います。その課題といえますのは、新島襄に関しての課題であります。つまり、ニコライは京都に来るごとに、新島の同志社のことを気にしていました。新島のことを気にして会おうとしてるんですね。しかし新島はいろいろ弁解して会いませんでした。新島は東京に何度も行くチャンスがありましたから、ニコライに会おうとすれば会えたはずですよ。でもニコライに会ったという記録は全くありません。同様に福沢諭吉と新島はたくさんの共通の友人がある。そして互いに意識してるんです。そのことは新島の書いたもの、福沢の書いたものを読めば分かります。互いにあれほど意識していながら、一度も会ったことがない。新島襄に関するこの点はミステリーでしょうか？誰か説明できる日が来るでしょうか、というのが私が最後に出したい課題であります。新島先生は、不思議な人です。そういう面があります。時間がきましたので、これでシンポジウムは終わらせていただきます。3人の方々、どうもありがとうございました。

(2014年8月9日開催／文責：編集委員会)

